

訓練生募集と生徒の適応断面

1. 訓練生募集のこと

昭和30年に補導所として発足し、皇太子をお迎えしたこともある由緒あるN総高訓も、45年度は1.3倍の応募者があり選抜のゆとりがあったが、46年度はかなりの募集難が予想されるということであった。県から移ってこられたというK校長によると、高校進学率が市内で94%、郡部ですら8%を越え、県訓などでは定員の90%にも満たない程の募集難となっており更に市内に大企業工場（三菱電機、富士電機）が出来て中卒者の誘致が図られていることからますますその度を加えているという。

同校では、こうしたことに対して、県教育委員会に働きかけて、44年度から、総高訓に進む者について進学扱いとすることが決定されており、中学校を通じてそのような指導が生徒に行なわれてきた。また、従来の有線放送に加えて45年度から新たにテレビ放送による募集活動を行なった由で、積極的な良い意味での定員確保への並々ならぬ努力の程が窺えたのである。

N県には2つの総高訓と12の専修校（分校を含む）とがある。このため給源について県の訓練課との話し合いで、原則としてN総高訓は周辺6地域、N専修校は3地域というように給源区域を定めて競合をさけている。しかし乍ら、専修校の一部では、46年度から機械科等特定の科について2年課程を設けることになっており、共倒れの不安を強く感じた次第である。

またこの募集に関して、N総高訓は45年度の入試を公立高校のそれと同一期日として二股受験を防ぐ処置がとられている。こうして入校した中卒者の知能偏差値平均は、今回調査の結果、前年度の平均値と同一であるが、その分散がどうなっているか興味ある問題である。

2. 検査の実施

自由記述のときに、私はT先生、U先生の教室にそっと伺った。丁度イントロの最中だった。微に入り細に互っての説明を嚙んで含めるように云って聞かせ、質問させ、板書する、子供達はコックリコックリと頭で返事してい

た。

よし、これでテストはOK、私は感謝と安心感をもって先生に目であいさつし、私の教室に戻った。

それは3~4分の間ではあるが、私の生徒達はザワメキもなく熱心に書いていた。

テストは私一人では決して出来るものではない、周到な準備と、先生の援助と、そして生徒達の協力とによって2日間にわたるテストを順調に了えることが出来たのであり、改めて感謝する次第である。

3. 高訓と専修校

N総高訓では校長はじめ各科の主任の先生方が、出来る限りよい子供を入れようという積極的な姿勢が窺えた。実際に45年度はふるい分けの余地があり、自動車整備科のM主任、機械第3科のI主任には、生徒の質は概して良く、卒業後の職場の評判も非常に良いということをお話されるゆとりがあった。

N総高訓のI主任は次のように言われた。

「修了生の1人が、選ばれて技能五輪県大会に出場した。彼は中学時代の成績がall 4、性格的にも良い子供で、特に高訓を希望して来た」と。

また同校K校長曰く、「技能五輪出場、欧米派遣等の秀れた卒業生が出ているが、こうした存在は生徒に与える影響が大きく、励みになっている。兎角学歴偏重の傾向にあるが、無目的的に高校を出ても、職場を転々とするようでは無意味であろう。

高訓としては、学校教育には求めることの出来ないメリットを与え得るようにすることが必要であり、高卒の資格を与えることも一つの手段ではあるが、そればかりではないように思う」と。

ところで、専修校の方は、県の訓練科Y主事のお話によるとかなり苦しんでいる。

45年度は定員1000名に対して838名の入所者となったが、社会政策的立場から多少能力的に劣る者でも入れざるを得ない由で、例えば、U専修校は自整科で伝統ある訓練校として以前から、整備士の合格率100%を

誇つてきたが、最近では低迷を続け、45年度も80%であり、他校では65%というところもあったという。

また、100名を超える高卒入校者があったものが、44年度には62名、更に45年度は49名と半分以下に減少し、専修校の体質改善の必要に迫られているということであった。

このようなことに対し、では中学校や教育委員会はどうみているのだろうか。

4. N県教育委員会と中学校

N県の教育ビジョンは、人間能力の開発と学術教育都市建設にある。

教育委員会では教育主事と指導係長のお二人に、そして中学校では夫々指導主任の先生にお合い出来、進路指導について次のことを伺ったのである。

1. 教育委員会

県下の高校進学率は市部で95%、避地でさえ70%を超える高率であり、所謂名門校（N高校、N工業、S高校）への集中が激しく学校差として意識されるようになっている。

委員会としては、教育環境の平準化の一環として学区制をとろうとしたが実現出来なかった。兎に角高校自体も選ばれるというのが実状である。高訓については各種学校として進学扱いとし、中学校に対して、生徒の個性や能力を伸ばせるような方向づけの進路指導を行なうよう指示している。

特に「進路指導研究協議会」によって、中学校教師が参加して定期的に研究及び伝達を図っている。

これらがどう活かされていくかは中学校の指導主任の先生にかかっているという。

N県では、中学校の指導主任は校長の任命となっており、一般に3年生の担任の中から選ばれる。従って進路指導の基準時間は3年間で35時間であるがその内容については、ホームルーム、学業、進路選択等の中で自由に学校毎に企画される。

ではこうした中で、訓練校がどのように見られ、どう位置づけられているであろうかという点については明快なコメントを得られなかった。

ロ. 中学校にて

N市内のH中学とS中学をお訪ねした。1つは農村を控えた地域、1つは新興団地を控えた地域であるが、いずれも共通しているのはサラリーマン家庭が圧倒的に多いことである。両校とも高校進学率90%を越え、私のみた7学級128名の男子のうち、就職者は5名だけで僅かに4%である。

S中学校のI指導主任によると、

「目的もなくただ高校でありさえすれば良いという親御さんが案外多い、子供の能力、適性を見て、その子供に合う方向を勧めるのであるが、やはり最後の土端場に来て高校だけは出したいと、それも父親が決めていますね」ということであった。訪問に備えて、出身訓練生の成績や日常のことを総高訓で聞いてメモっていたので、中学校の指導主任と当時の学級担任にお伝えしたのである。訓練校でよく伸びている子供の話をするのは私にとっても嬉しいことであったが、適応の好ましくない子供についてはつい口も重くなるのを覚えた。

ハ. H中学校のM君とY君

中学校でクラスは別々だったがそろってN総高訓の電気機器科に入った。中学校での成績は2人ともあまりパツとせず、M君が中以下、Y君は中程度だった。この2人の知能偏差値は、M君が55、Y君が59といずれも良い素質を持っている。高訓に入ってから成績は、M君が学科実技とも27人中6位と上位にあり、Y君も又、学科で4位（実技は計測ミスから下位得点となったが、必らず伸びると電気機器科のY先生が太鼓判を押していた）と夫々気を吐いている。

この二人は高訓に入って本来の素質が生かされて良い適応を示したもので、電気機器科Y先生の、「良い生徒を寄こして呉れた」という言葉を伝えると、H中学校の丁指導主任は「やって呉れましたか」とニコニコしていた。

ニ. S 中学校の Y 君

S 中学校で Y 君の話に入ると、同校の I 指導主任は、「私はあの子の担任でした、怪我せずにやってくれてるでしょうか、彼は知的に劣り (SS 30 で学力では all 1)、個人指導が必要な子供で、私はとても訓練には無理だと考え、本人にも親にも就職をすすめたのですが、親御さんのたっの願いで高訓にお願いしたのです、ということで、彼が極く素直であること、手仕事に興味をもっていること、学校のクラブで、螢光灯台の組立のとき彼がおそくまで残って兎に角完成させたときの喜びよう、等々を熱心に語られたのである。

その Y 君は、木工科に入って訓練成績は 28 人中の 28 位、木工科の丁主任のマークしている一人であった。中学校の学籍簿に「個人指導を要す」とあり、丁主任の御苦勞が良く分る。

さて、両校からの N 総高訓入校者の知能偏差値を学習指導要録でみる

と、H 中学校	36	36	46	51	53	55	61
S 中学校	30	39	44	44	50	53	

となっており、今度もやはり高訓入校者の知能の分散は大きそうである。』